著者の許諾なく、無断で引用することは禁止します。
Do not quote without author's permission.

HOKKAIDO UNIVERSITY

2014.11.15　熱帯森林ローカルガバナンス研究会

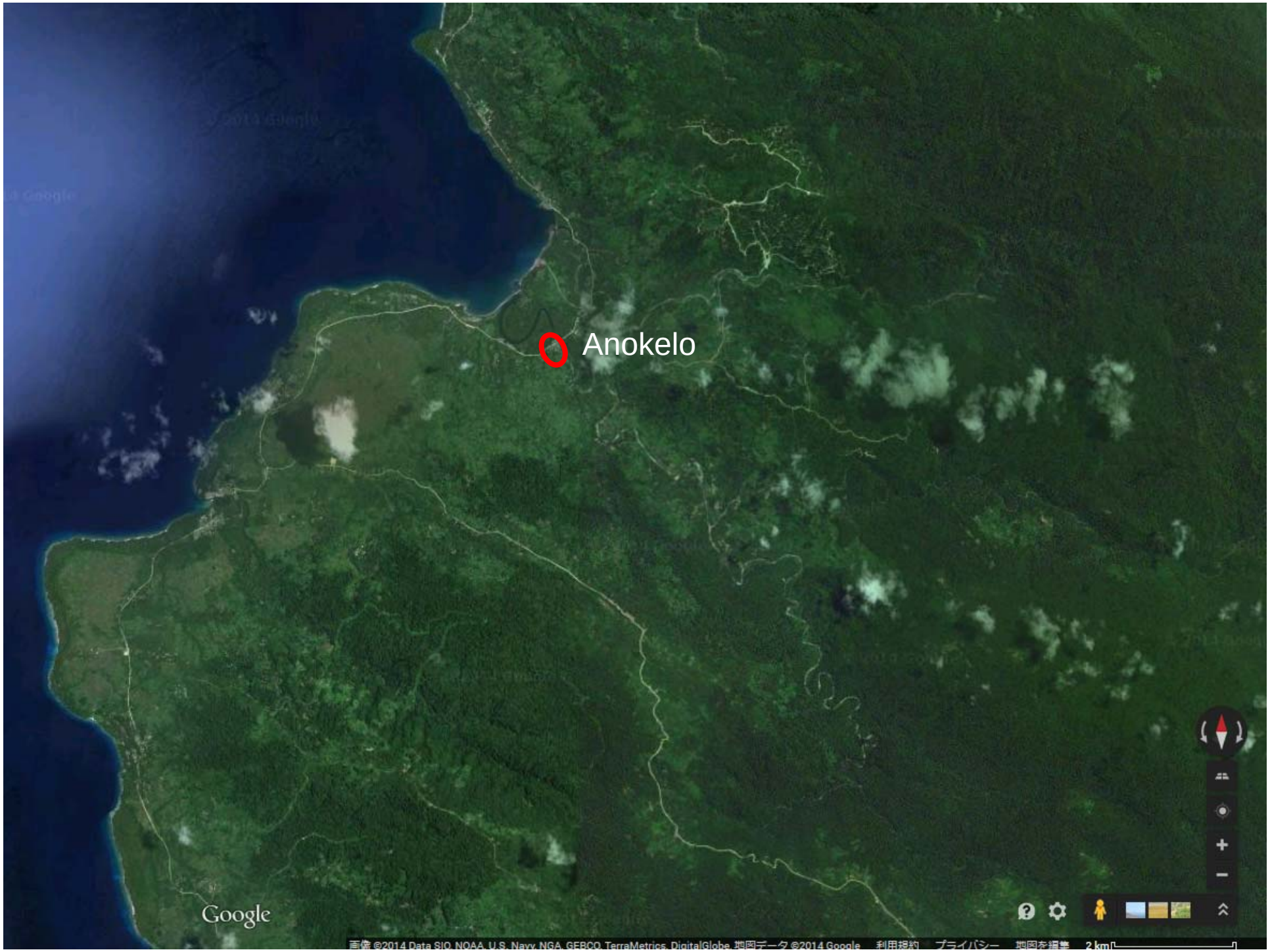
生活を組み立てることと自然資源

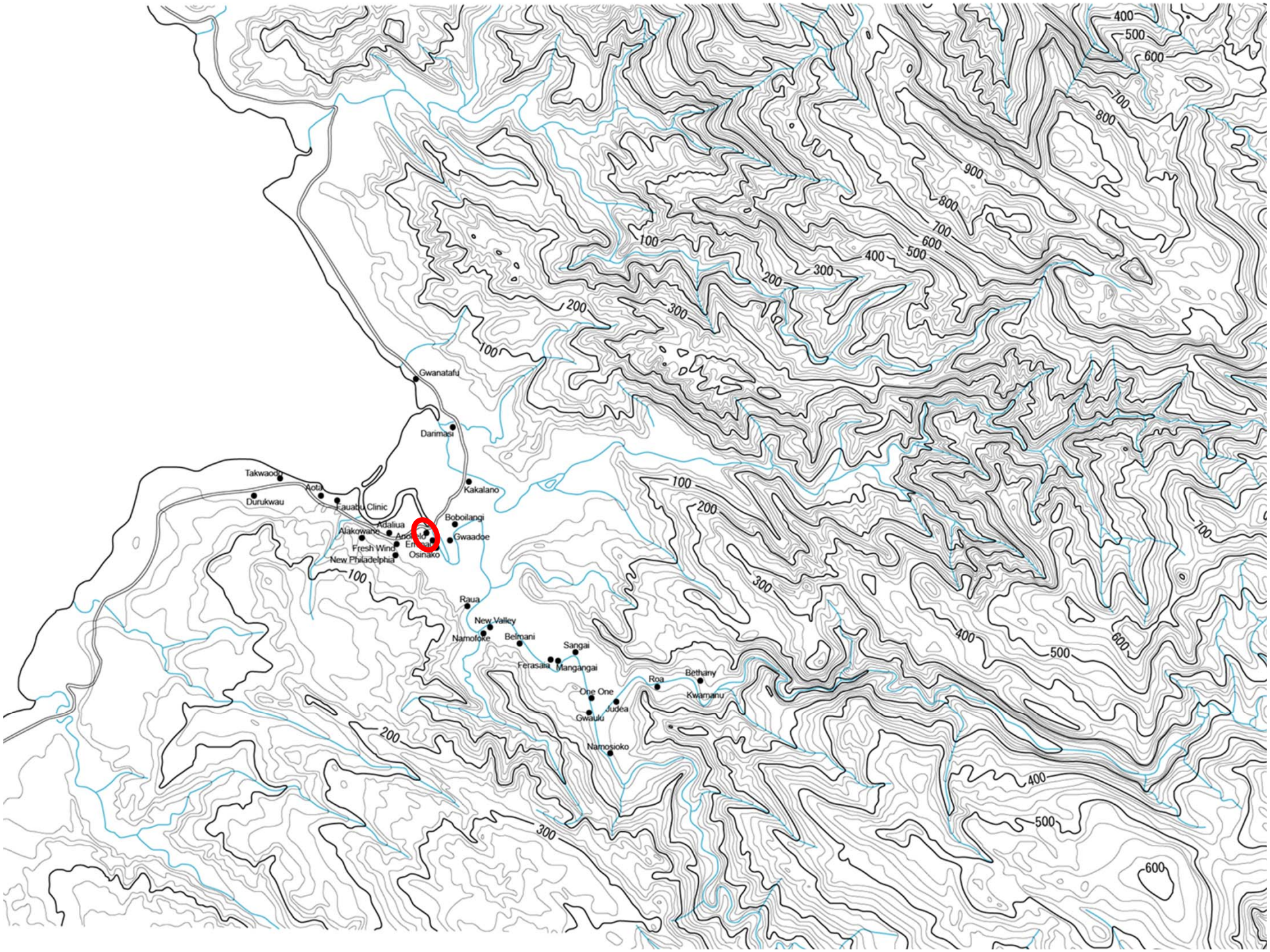
ソロモン諸島マライタ島で考えたこと

北海道大学　宮内泰介

パプアニューギニア
パプアニューギニア
ソロモン諸島
オーストラリア
ニュージーランド
マライタ島
ホニアラ
ガダルカナル島
ソロモン諸島

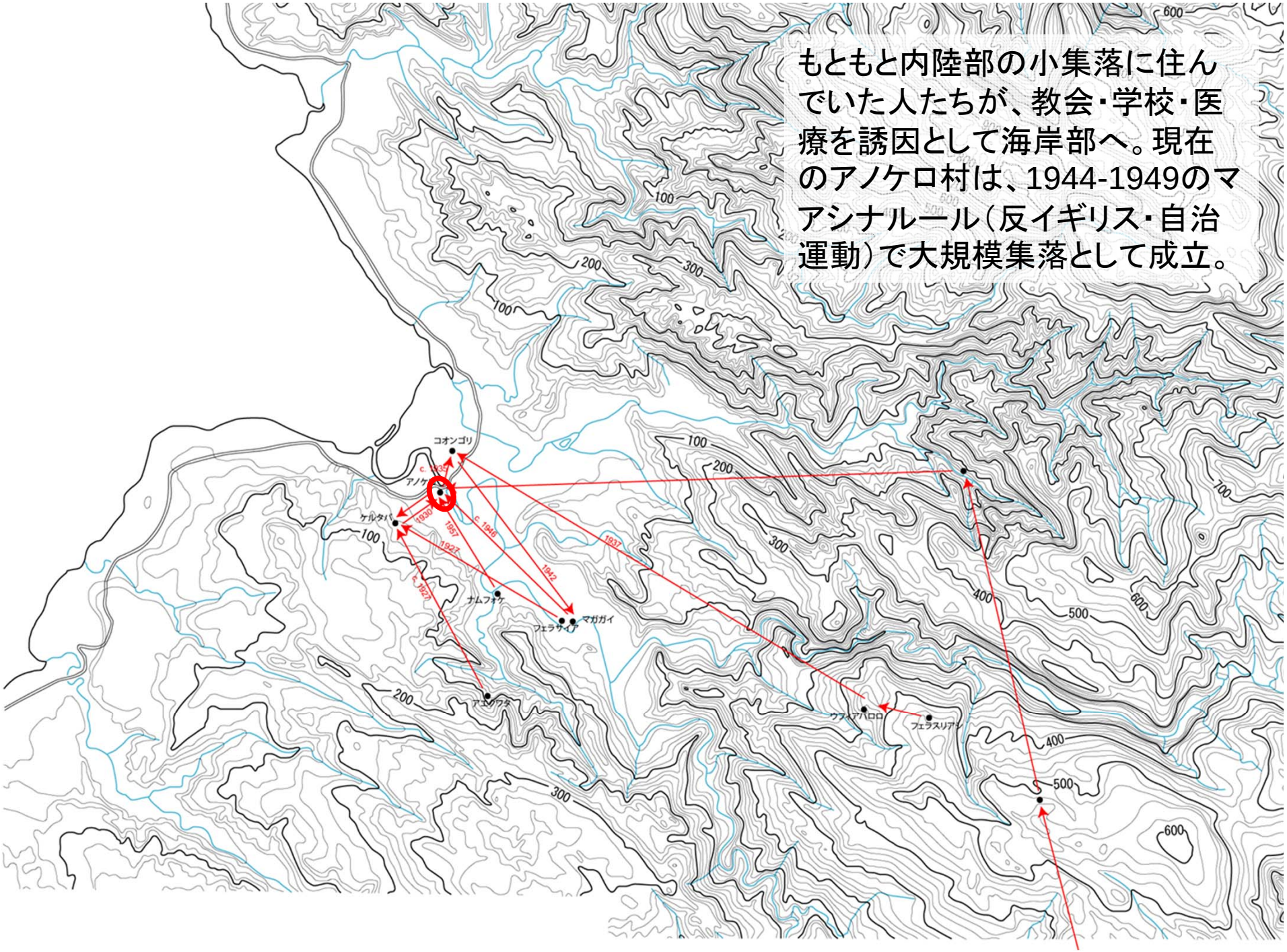
もともと内陸部の小集落に住んでいた人たちが、教会・学校・医療を誘因として海岸部へ。現在のアノケロ村は、1944-1949のマアシナルール（反イギリス・自治運動）で大規模集落として成立。


Anokelo
Google
画像 ©2014 Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO, TerraMetrics, DigitalGlobe, 地図データ ©2014 Google
利用規約
プライバシー
地図を編集
2 km


Gwanatafu
Darimasi
Takwaodo
Aota
Durukwau
Fauatu Clinic
Kakalano
Boboilangi
Adaliua
Alakowabe
Gwaadoe
Fresh Wind
Osinako
New Philadelphia
Raua
New Valley
Namotoke
Belmani
Sangai
Ferasaia
Mangangai
Roa
Bethany
Kwamanu
One One
Judea
Gwaulu
Namosioko
100
200
300
400
500
600
700
800
900

Anokelo
もともと内陸部の小集落に住んでいた人たちが、教会・学校・医療を誘因として海岸部へ。現在のアノケロ村は、1944-1949のマアシナルール（反イギリス・自治運動）で大規模集落として成立。
Google
画像 ©2014 DigitalGlobe, 地図データ ©2014 Google 利用規約 プライバシー 地図を編集 100 m

もともと内陸部の小集落に住んでいた人たちが、教会・学校・医療を誘因として海岸部へ。現在のアノケロ村は、1944-1949のマアシナルール（反イギリス・自治運動）で大規模集落として成立。



P.A.さんの人生

- **1959**年、マライタ島アノケロ村生まれ。
- **1975**年（**16**歳）、両親とともにガダルカナル島のアブラヤシ・プランテーションへ。
  - プランテーションでは、建設部門で主に働く。労働組合活動にも従事。
- **1978**年、結婚。
- **1991**年、アノケロ村に戻る。
- **1996**年、ホニアラに出稼ぎ（建設関係）。以降、短期・中期の出稼ぎを繰り返す
- このころ、ガダルカナル島の土地を購入
- **1999**年、民族紛争により、アノケロ村に戻る。以降、村での生活。
- 一時、より内陸部への移住も計画（頓挫）
- **2013**年、病気により逝去

ガダルカナル島のアブラヤシ・プランテーション

P.A.さんの人生を“説明”する

植民地支配、教会、海岸部への移住、道路、物資へのアクセス、近代

プランテーション、労働移住、交通（道路・船）

- **1959**年、マライタ島アノケロ村生まれ。
- **1975**年（**16**歳）、両親とともにガダルカナル島のアブラヤシ・プランテーションへ。
  - プランテーションでは、建設部門で主に働く。労働組合活動にも従事。
- **1978**年、結婚。
- **1991**年、アノケロ村に戻る。
- **1996**年、ホニアラに出稼ぎ（建設関係）。以降、短期・中期の出稼ぎを繰り返す
- このころ、ガダルカナル島の土地を購入
- **1999**年、民族紛争により、アノケロ村に戻る。以降、村での生活。
- 一時、より内陸部への移住も計画（頓挫）
- **2013**年、病気により逝去

焼畑、自然資源へのアクセス、相互扶助、村の人間関係

教育、現金収入

二重戦略の究極、土地へのアクセス

紛争、焼畑、自然資源へのアクセス、村の生活

自然資源へのアクセス、「土地所有」

医療、病気

さまざまな資源（リソース）を組み合わせて生活を組み立てる住民

焼畑

タロイモ
（*Colocasia esculenta*）

町の物資、雇用

TOYOTA
PAJERO
BREAD KITCHEN
パプアニューギニア
ソロモン諸島
オーストラリア
ニュージーランド

商品作物
パプアニューギニア
ソロモン諸島
オーストラリア
ニュージーランド

商品作物

学校

医療

相互扶助

人間関係

さまざまな資源（リソース）を組み合わせて生活を組み立てる住民

半栽培（自然資源との関係）

栽培	栽培植物	タロイモ，サツマイモ，ヤムイモ，各種野菜
半栽培	組織的に植栽される植物	ココヤシ，サゴヤシ，ビンロウジュ
半栽培	植えたものから移植される植物	竹（カオアシ），パンダナス
半栽培	天然林から移植される植物	ガリの木，竹（カオ）
半栽培	人里近くに生える植物	アマウ
半栽培	手を加えられる野生	ファサ
自然	野生	ファサなどの大木，籐

パプアニューギニア
ソロモン諸島
オーストラリア
ニュージーランド

タロイモ
（*Colocasia esculenta*）

Iosi (Saccharum edule)
キャッサバ
サツマイモ

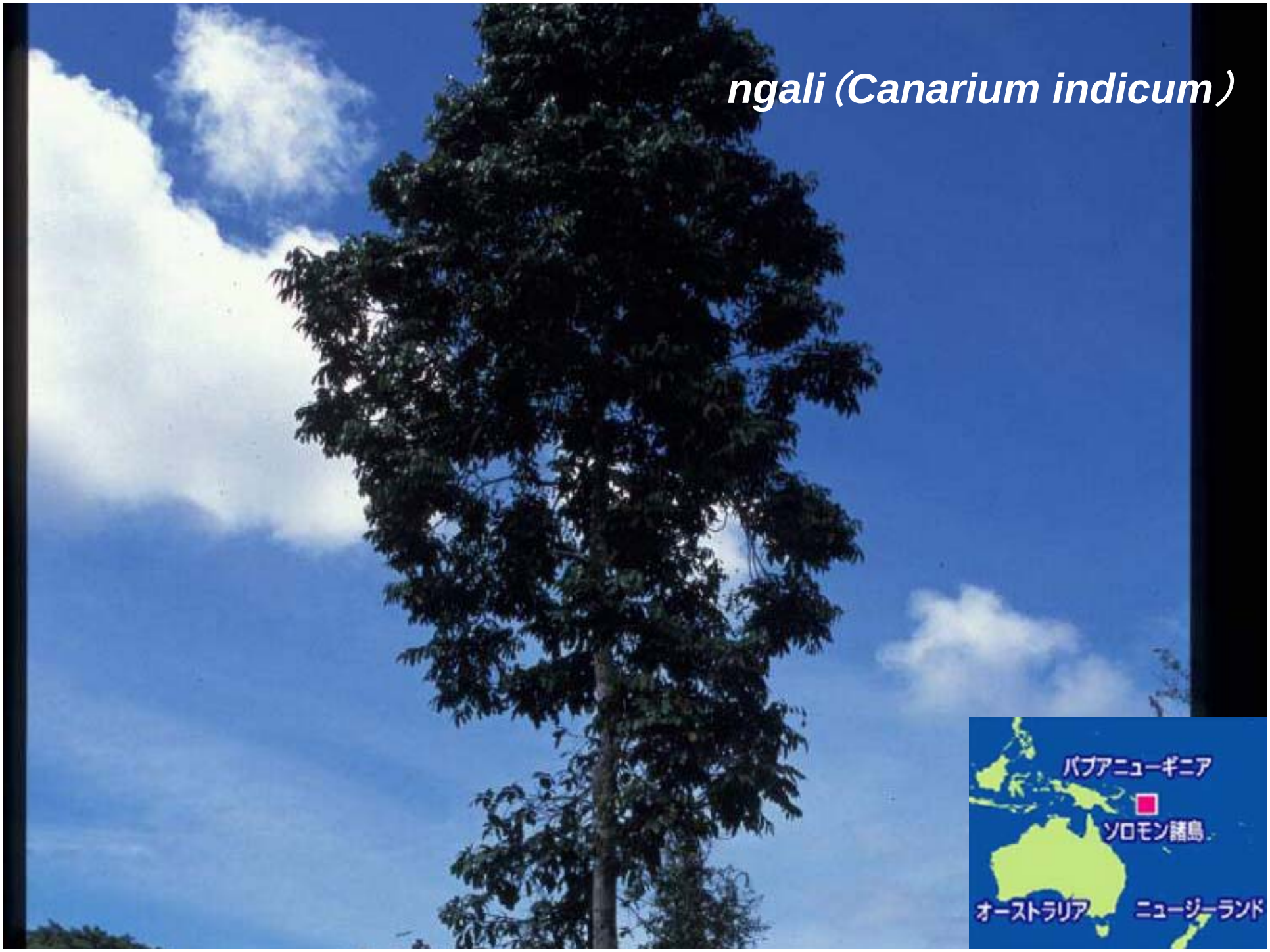
サゴヤシ
（***Metroxylon salomonense***）

サゴヤシと竹（*kaoasi*）と
籐で屋根を作る

kaufe（*Pandanus* sp.　和名アダン）

kaoasi（Bambusa blumeana）

kaoasi（Bambusa blumeana）を植える


ngali（Canarium indicum）
パプアニューギニア
ソロモン諸島
オーストラリア
ニュージーランド

ngali（Canarium indicum）

ngali（Canarium indicum）を植える

amau（Ficus copiosa）

amau（Ficus copiosa）

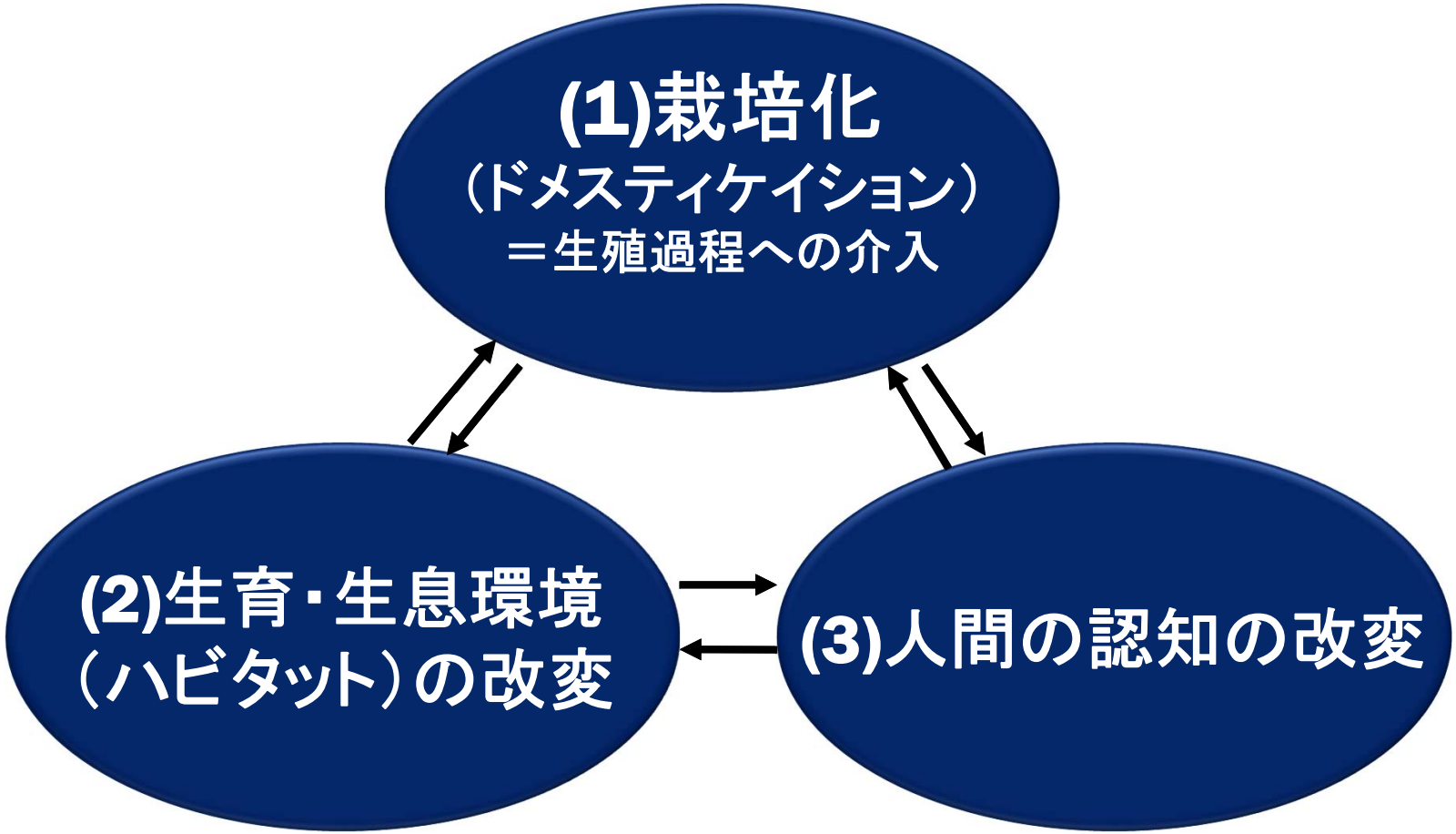
籐 kalitau（Calamus sp.）

fasa（Vitex cofassus）

*fasa（Vitex cofassus）*でカヌーを作る

abalolo
絞め殺しの
木

半栽培の3つの次元



中尾佐助の「半栽培」

- 人類がどうやって狩猟採集生活から農耕に移行したのか？という問い

  →その移行には長い「半栽培」段階があったのではないか

  アマゾンの野生のパラゴム（***Hevea brasiliensis***）：居住地の近くに数多く生えていて、しかも変異株がいろいろ見られることに注目。住民たちが無意識のうちにそれに手をかけている「半栽培」と考えた。日本のクリ、西アフリカのパルミラヤシ、東南アジアの野生種タロイモなど。

- 半栽培の**3**つの類型（パプアニューギニアの事例から）

  （1）自然生態系の中から特定の野生種を利用するもの（たとえば、パンダナス***Pandanus* spp.**、とくに***Pandanus julianettii***）

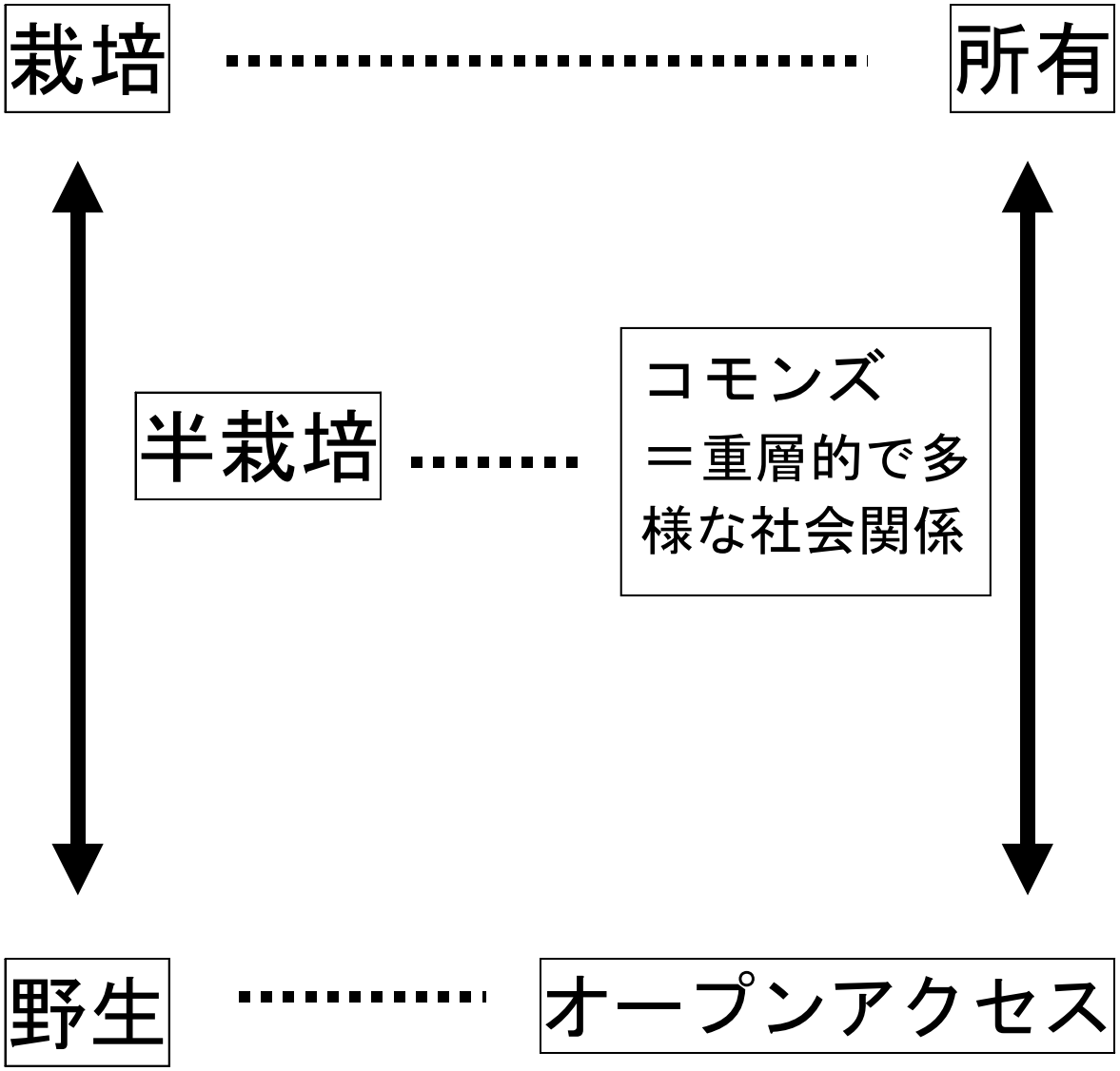
  （2）畑地の雑草の中から特定植物を利用、保護、栽培するもの（たとえば、***Rungia klossii***）

  （3）いった栽培化されたがそこから「脱出」して野生化したもの（「脱出野生化植物」）（たとえば、クワズイモ ***Alocasia***、サトイモ ***Colocasia***、ウコン）

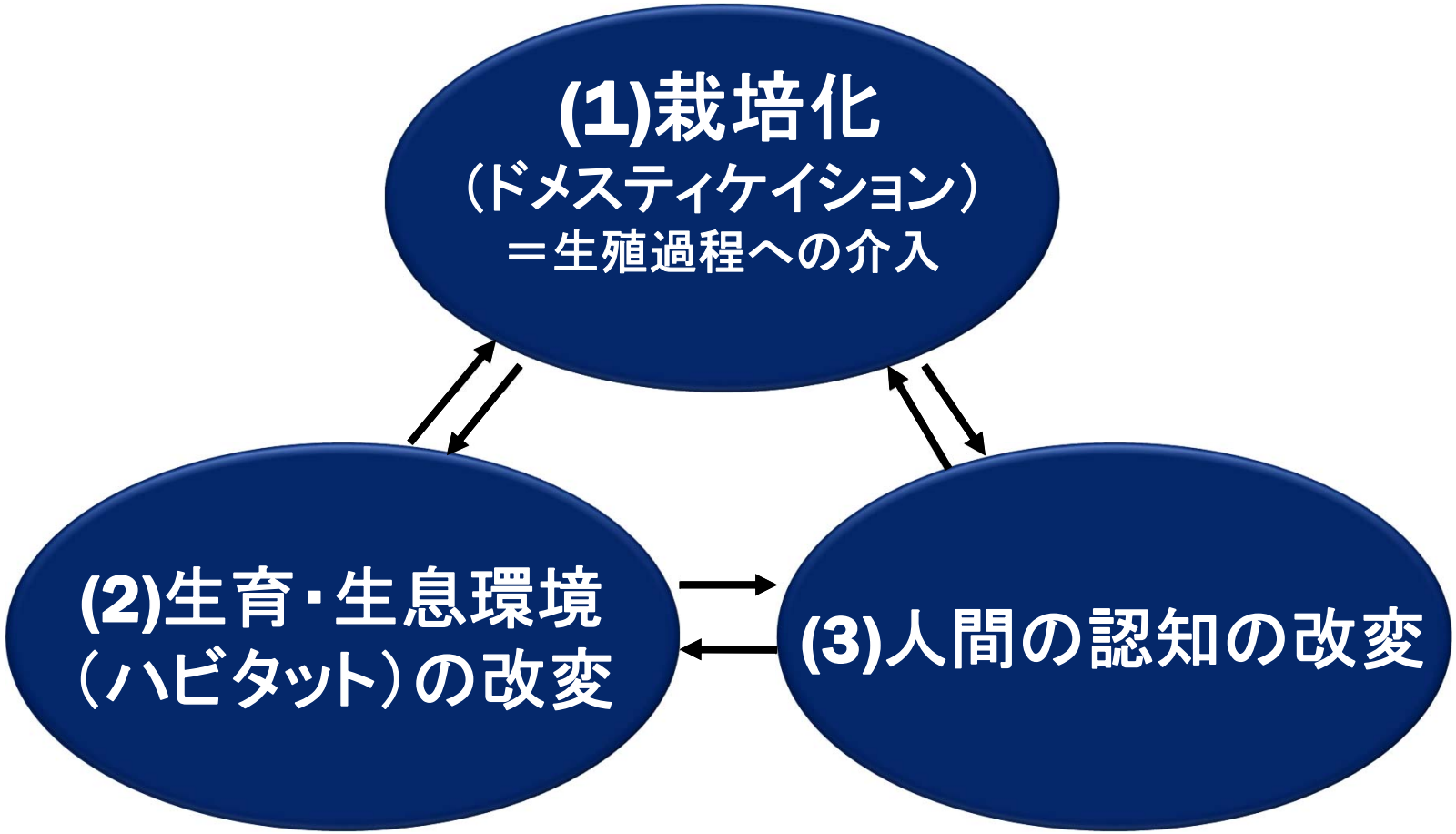
＝歴史的概念としての「半栽培」

共時的概念としての「半栽培」
=人と自然との間の実に多様な関係としての「半栽培」

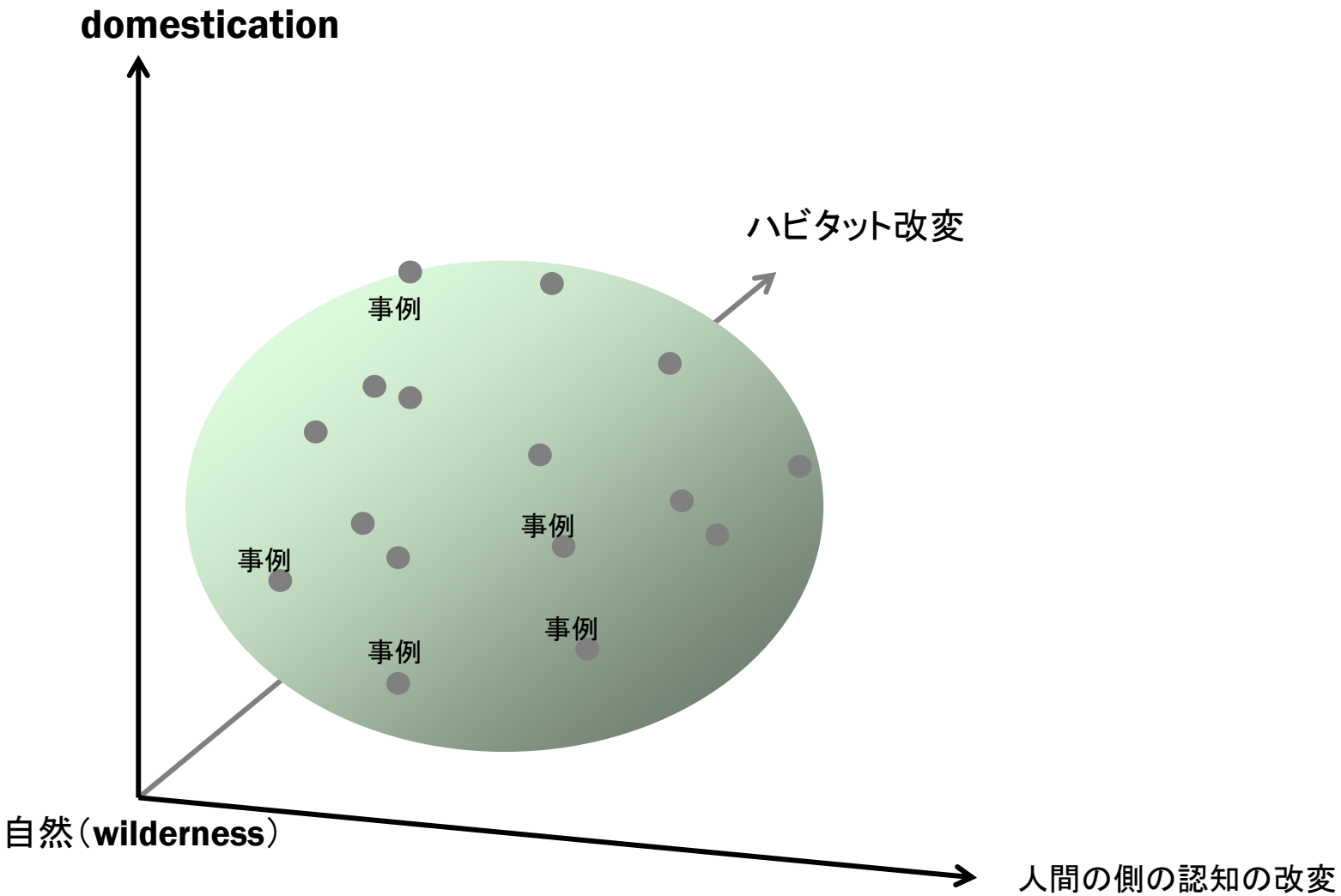
栽培	栽培植物	タロイモ, サツマイモ, ヤムイモ, 各種野菜
半栽培	組織的に植栽される植物	ココヤシ, サゴヤシ, ビンロウジュ
半栽培	植えたものから移植される植物	竹(カオアシ), パンダナス
半栽培	天然林から移植される植物	ガリの木, 竹(カオ)
半栽培	人里近くに生える植物	アマウ
半栽培	手を加えられる野生	ファサ
自然	野生	ファサなどの大木, 籐


栽培
所有
半栽培
コモンズ
＝重層的で多様な社会関係
野生
オープンアクセス

半栽培の3つの次元



半栽培の3つの次元


domestication
ハビタット改変
事例
事例
事例
事例
事例
自然（wilderness）
人間の側の認知の改変

多様な半栽培を可能にする“社会的しくみ”＝ソロモン諸島における所有権・利用権

1. トライブの総有が基本
2. その総有は近代的な「所有」ではない
3. 権利は折り重なっており、かつ、あいまいさを含む（「女のラインのトライブ」の権利）
4. 所有と利用が折り重なっている

民族紛争と生活戦略

民族紛争！
NGO
教会
土地制度（重層的コモンズ）
半栽培（自然資源との関係）
相互扶助のしくみ
人的ネットワーク
技術
交通
医療
学校教育
消費物資
市場販売ルート
生活を組み立てる

民族紛争の経緯

1998年12月	ガダルカナル島武装勢力（IFM: Isatabu Freedom Movement）が登場
1999年3月	IFMによる他島民排斥が始まる。以降8月までが他島民（主にマライタ島民）の避難ピーク。
2000年1月	マライタ島武装勢力（MEF: Malaita Eagle Force）登場。以降、IFM対MEFの間の抗争続く。
2000年6月	MEF、首相を拘束、ホニアラを制圧。
2000年10月	IFMとMEF、オーストラリア・タウンズビルにて和平合意調印。しかし、ガダルカナル側一部民兵が残存。
2003年7月	オーストラリア軍介入し、民兵解体へ。「ソロモン諸島地域支援団」（RAMSI）による統治始まる

P.A.さんの人生を“説明”する

植民地支配、教会、海岸部への移住、道路、物資へのアクセス、近代

プランテーション、労働移住、交通（道路・船）

- **1959**年、マライタ島アノケロ村生まれ。
- **1975**年（**16**歳）、両親とともにガダルカナル島のアブラヤシ・プランテーションへ。
  - プランテーションでは、建設部門で主に働く。労働組合活動にも従事。
- **1978**年、結婚。
- **1991**年、アノケロ村に戻る。
- **1996**年、ホニアラに出稼ぎ（建設関係）。以降、短期・中期の出稼ぎを繰り返す
- このころ、ガダルカナル島の土地を購入
- **1999**年、民族紛争により、アノケロ村に戻る。以降、村での生活。
- 一時、より内陸部への移住も計画（頓挫）
- **2013**年、病気により逝去

焼畑、自然資源へのアクセス、相互扶助、村の人間関係

教育、現金収入

民族紛争の原因

二重戦略の究極、土地へのアクセス

紛争、焼畑、自然資源へのアクセス、村の生活

医療、病気

自然資源へのアクセス、「土地所有」

民族紛争における避難民たちの行動（マライタ島民）

名前	生年	性別	出身地（3）	結婚年	配偶者の出身地（3）	ガダルカナルでの生活			土地購入		IFMとの遭遇	マライタへの避難の時期	家族のマライタへの避難の時期	避難先		子供		避難後再びホニアラへ移住（5）	平和協定終結後、ホニアラに移住
						ガダルカナルでの居住年	ガダルカナルでの仕事	ガダルカナルでの居住場所（4）	土地購入	土地購入の時期				避難先イコール夫の出身地	避難先イコール妻の出身地	一部の子供は学校のためまだガダルカナルに	一部の子供は仕事のためまだガダルカナルに		
ZO	1939	男	IV		I	1965-1973, 1976, 1990-2000	左官業	ホニアラ	×		間接	×	10-11月	○	○			×	○
JK	第二次大戦前	男	I	1960年代後半?	III	1965-1984, 1990-1999	いろいろ。最後の2年は藤家具工場。	ホニアラ	×		直接	11月		○	×	×	○	×	×
LL	c.1940s	男	III			1999	小学校教師	SIPL	×		間接	6月		×	×	○	○	×	○
BB	1941	男	I			?-1999	政府の海洋局	ホニアラ	×		間接			○				×	×
BE	1942	男	III, I	1962		1981-1986, 1991-1999	教会	ホニアラ	○（兄弟で）	1992	間接	8月		○	×		○	×	×
II	1945	男	I	1968		1974, 1980-1999	教会、公務員、畑	ガダルカナル ホニアラ	×					△（隣村）	○		○	×	×
SO	1948	男	IV	1967	I	1995-1999	畑	ホニアラ	×		直接	12月	12月	×	○	×	×	×	×
KA	c.1950	男	I	1975	III	1970s-1999	タクシー・バス・トラックのビジネス	ホニアラ	×			8月	8月	○	×	×	○	△	×
JF	c.1952	男	III	1986	I	1987-1999	SIPL（アブラヤシ・プランテーション）	SIPL	×		間接	8月		○	○			×	×
GW	1955	男	II		I	1982-1999	SIPL（アブラヤシ・プランテーション）	SIPL	×		間接	8月	5月	×	○	○		×	×
AM	1958	女	I			1989-1999	畑, 養鶏、養豚	ガダルカナル	○		直接	12月	夫はホニアラに残る	×	○			×	○
SR	1958	男	I	1979	I	1975-1999	伐採会社、菓子工場、建設、籐家具工場	ホニアラ	×		直接	7月	7月	○	○			×	×
RR	1959	女	IV	1974	I	1959－1974, 1985-1999	（夫は刑務所勤務）	ホニアラ	×		直接	7月		○	×	×	×	×	○
PA	1959	男	I	1978	II	1975-1991, 以降断続的-1999	SIPL（1975-1991）, 建設請負	ホニアラ、ガダルカナル	○		間接	10月	家族はもともと村に	○	×	○		×	×

民族紛争における避難民たちの行動（マライタ島民）

名前	生年	性別	出身地（3）	結婚年	配偶者の出身地（3）	ガダルカナルでの居住年	ガダルカナルでの仕事	ガダルカナルでの居住場所（4）	土地購入	土地購入の時期	IFMとの遭遇	マライタへの避難の時期	家族のマライタへの避難の時期	避難先イコール夫の出身地	避難先イコール妻の出身地	一部の子供は学校のためまだガダルカナルに	一部の子供は仕事のためまだガダルカナルに	避難後再びホニアラへ移住（5）	平和協定終結後、ホニアラに移住
JI	c.1960	男	I		I	1995-現在（それ以前にも8年間）	たばこ工場	ホニアラ	×		間接	×	9月	（家族が〇）	（家族が〇）	×	×		
RS	1963	女	II	1981	I	1981?-1999	夫の兄弟共同経営の養鶏など（夫はそれまでビスケット工場）	ホニアラ	〇（夫の兄弟で）	1992	直接	12月	12月	〇	×	〇		〇	
TS	1964	男	I		I	1988-1999	伐採企業、車の修理屋（自営）	ホニアラ	×		間接	12月		〇	×	×	×	×	×
MA	1965	男	I	1983	II	1980-1983, 1991-1999	SIPL（アブラヤシ・プランテーション）	SIPL	×		間接	5月	5月	〇	×			×	×
AB	c.1967	女	I	1985	III	1984-1999	畑（夫は水道局で働く）	ホニアラ	×		直接	8月	（夫は8月までホニアラに）	×	〇	×		△	〇
HS	1968	男	I	1994	IV	1980-現在	SIPL(幹部候補）	SIPL	〇（父が）	1992	間接	12月	×	〇	×				
EM	1970	女	I	1985	II	1988-1999	（夫は水産物貿易会社で働く）	ガダルカナル	〇（夫の父）		直接	6月		×	〇			×（夫は〇）	〇
AH	1973	男	IV			1973-1999	伐採会社、農業研究所	ガダルカナル	〇	1982	直接			×	×			×	×

マライタ島民たちがとった生活戦略

- 夫の出身村ないし妻の出身村など、便宜を求めてマライタ島の村へ「戻る」
- 一部はそのままマライタ島に残る
- 一部は徐々にホニアラへ戻る
  - 最大の雇用の場だったガダルカナル島のアブラヤシ・プランテーションは、会社が替わり（**GPPOL**）、マライタ島民を雇わないことに

民族紛争における避難民（マライタ島民）の類型

		避難先 （下線は、のちにホニアラに「戻った」住民）		
		夫の村へ戻った家族	妻の村へ戻った家族	その他
避難の類型	ガダルカナルに土地を購入した者たち	BE、PA*、RS	AM、EM	AH
	アブラヤシ・プランテーションで働いていた者たち	HS、MA	JF、GW	LL
	ホニアラの「タウン」内に居住していた者たち	JK、BB、KA、PA*、TS、RR、ZO**、SR**	II、SO、AB	JI

（注）**PA**は、複数の類型に属している。**ZO**、**SR**は夫婦の村が同一。

P.Aさんの人生を“説明”する

植民地支配、教会、海岸部への移住、道路、物資へのアクセス、近代

プランテーション、労働移住、交通（道路・船）

- **1959**年、マライタ島アノケロ村生まれ。
- **1975**年（**16**歳）、両親とともにガダルカナル島のアブラヤシ・プランテーションへ。
  - プランテーションでは、建設部門で主に働く。労働組合活動にも従事。
- **1978**年、結婚。
- **1991**年、アノケロ村に戻る。
- **1996**年、ホニアラに出稼ぎ（建設関係）。以降、短期・中期の出稼ぎを繰り返す
- このころ、ガダルカナル島の土地を購入
- **1999**年、民族紛争により、アノケロ村に戻る。以降、村での生活。
- 一時、より内陸部への移住も計画（頓挫）
- **2013**年、病気により逝去

焼畑、自然資源へのアクセス、相互扶助、村の人間関係

教育、現金収入

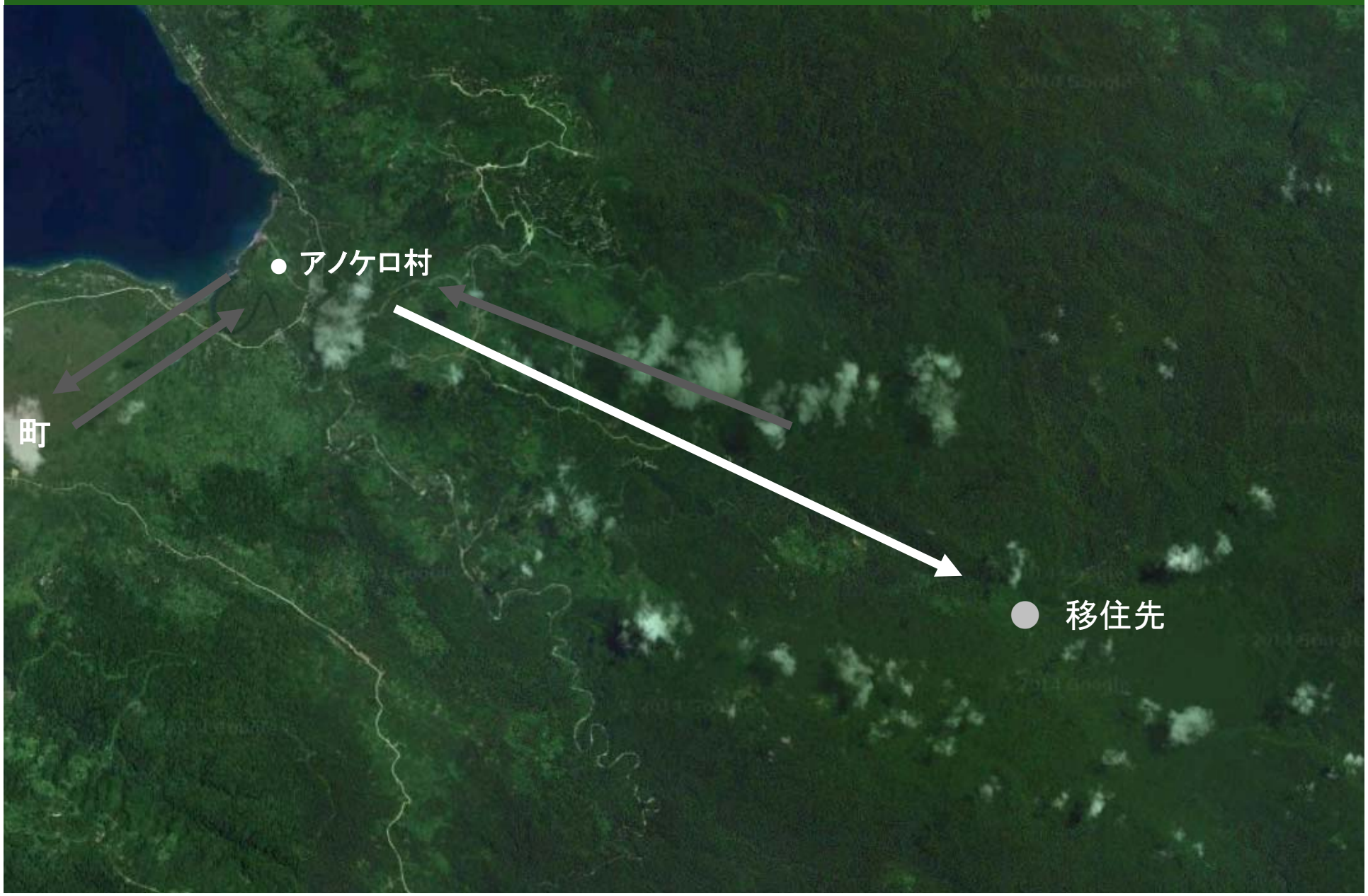
二重戦略の究極、土地へのアクセス

紛争、焼畑、自然資源へのアクセス、村の生活

自然資源へのアクセス、「土地所有」

医療、病気

Peterさんたちの内陸部への移住計画



このサブ・トライブの出自

トライブFの誕生話＝「トライブCからの女性がトライブEに嫁ぐ→夫と共にトライブEを離れる→トライブCから土地を分け与えられ、トライブFを形成」

トライブFのうち、現在の村にいっしょに移ってきたグループがこのサブ・トライブf

トライブF創設話

トライブCの女性がトライブEの男性のところに嫁いだ。この女性は100頭ほどのたくさんの豚を放し飼いで飼っていたが、その豚の糞を集めて捨てることをしないまま、毎日夫と畑に働きに出ていた。ある日、夫の姉妹たちが、この女性の豚の糞を集めて、この夫婦の家の前に捨てた。畑から帰ってこれを見た女性は、家に入って泣いた。夫は怒り、きょうだいのところへ行き、「自分たちにいてほしくないというしるしだな。じゃあ出て行こう」と言って、妻を連れて出て行った。ふたりはbeu abu（タンブーハウス）へ行って、カミを持ち出し、それをもって出た。

ふたりは女性の親がいるトライブCへ行っていったん休んだが、女性の父親がふたりに土地を分け与えた。このふたりを祖先とするトライブがFであり、その土地がFである。

移住計画の推移

- 「民族紛争」をきっかけに、サブ・トライブfの中で「自分たちの土地」へ移住しよう、という話に
  - 議論の中心は、民族紛争をきっかけに村に戻ってきたPeterさん
- **2000.11**　男8名で土地Eを訪れ、適切な土地を物色し、決定
- **2002.2**　再び男数人で訪れ、畑を開き、また簡易住居を作る
- 以降、何人かがときどき行って、1~2週間滞在し、畑仕事など

移住計画の意味するところ

1. これまでの生活戦略の延長上
2. 民族紛争による「自分たちの土地」意識強化

移住計画の意味するところ

1. これまでの生活戦略の延長上

Aさん――

「土地**E**には資源（ピジンでリソシス）がいっぱいあるからね。とくに建材になる“森の材”（ピジンでブッシュ・マテリアル）がたくさんある。しかも誰も住んでいない。さらに、畑の作物もよく育つ。タロもサツマイモも実際に植えてみたが、非常によく育つ。今住んでいるところの畑は、作物の出来がよくない」

＝自然資源重視

移住計画の意味するところ

1. これまでの生活戦略の延長上

Aさん――

「自分たちのいくらかが土地Eに住み、いくらかがアノケロに住むことになるだろう。子どもたちの学校のこともあるし。たとえば私の家族で言えば、私が土地Eへ行き、息子たちがこちら（アノケロ）に住む。ときどき私もアノケロに戻ってくる。しかし行ったり来たりを頻繁に行うには、移動手段の問題がある。土地Eへの道路を政府に要求したいと考えている」

＝生活戦略、生活の便宜の語り

移住計画の意味するところ

1. これまでの生活戦略の延長上

サブ・トライブfの0さん――

「なぜ土地Fではなく土地Eか？　それはおもしろい質問だ。実際に行ってみて、土地Fより土地Eにいい場所が見つかった。見つけた土地は、川に近く、畑にも適している。土地Fよりも木や籐などの自然資源が豊富だ。土地Fはまわりに人が住んでいるが、土地Eはまわりにまったく人が住んでいないのもいい。ただ、私たちの中には土地Fに戻ろうという者もいる。

私たちはトライブFだが、もともとはトライブEだ。だから、土地Eも、私たちのもともとの土地だ。私たちは、トライブFであると同時に、トライブEだ。」

移住計画の意味するところ

2. 民族紛争による「自分たちの土地」意識強化

Aさん――

「民族紛争のあと、この計画を決めた。ホニアラやガダルカナルで起こったことを見て、同じようなことがマライタの中でも起こるかもしれない、と考えた。マライタ人がガダルカナルから戻ったように、自分たちも、他人の土地である海岸部の土地を離れ自分たちの土地へ戻ろう、と考えた。自分たちの土地へ戻る好機だと考えた」

移住計画の意味するところ

2. 民族紛争による「自分たちの土地」意識強化

民族紛争で言われた

「マライタ人はマライタへ帰れ。自分たちの土地へ戻れ」

～ マライタ人も反論できない。「それは正しい」

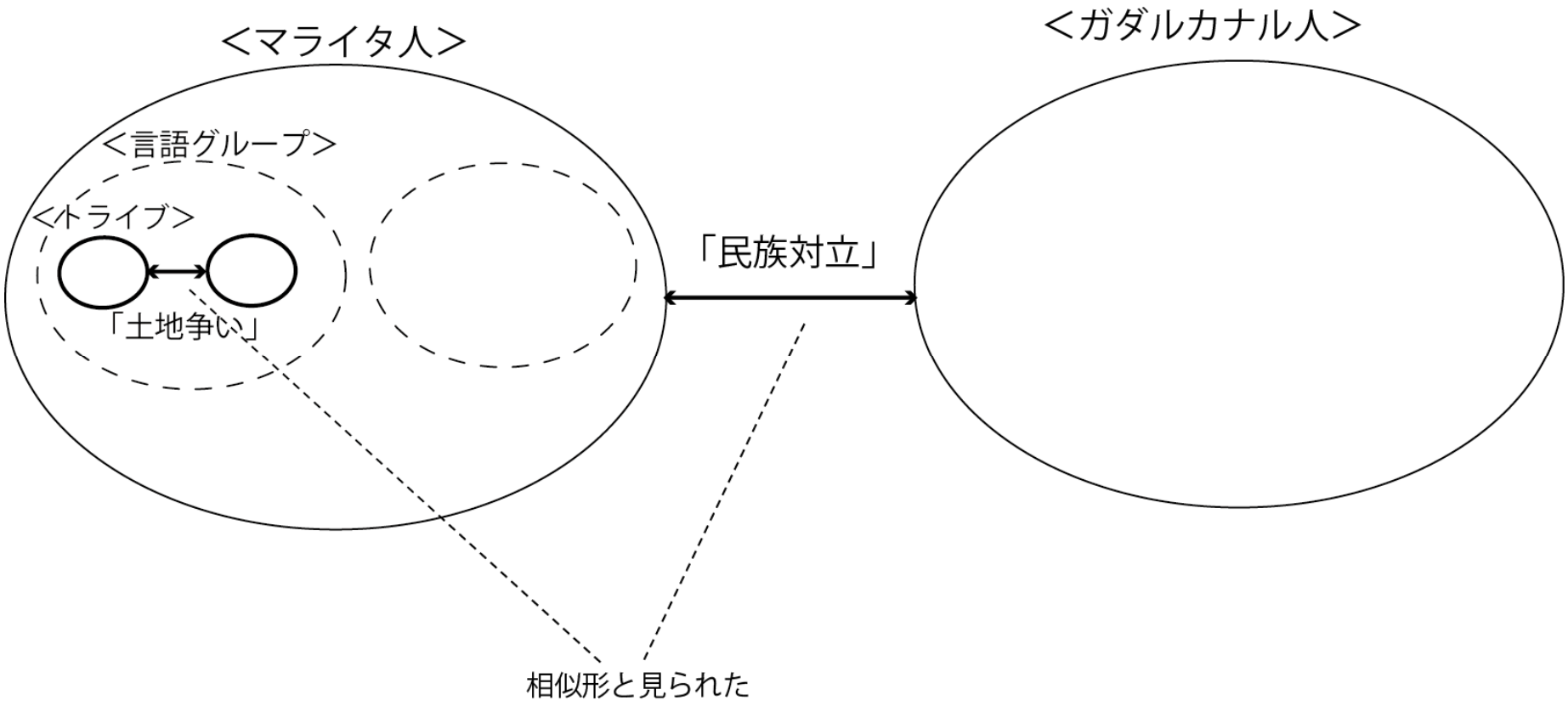
↓

トライブ・レベルでも「自分たちの土地へ戻ろう」という機運

＋ 紛争回避。不安定な土地利用への不安。

移住計画の意味するところ

2. 民族紛争による「自分たちの土地」意識強化



移住計画の意味するところ

広がりをもつ内陸部への移住計画

調査地周辺の多くの人々が

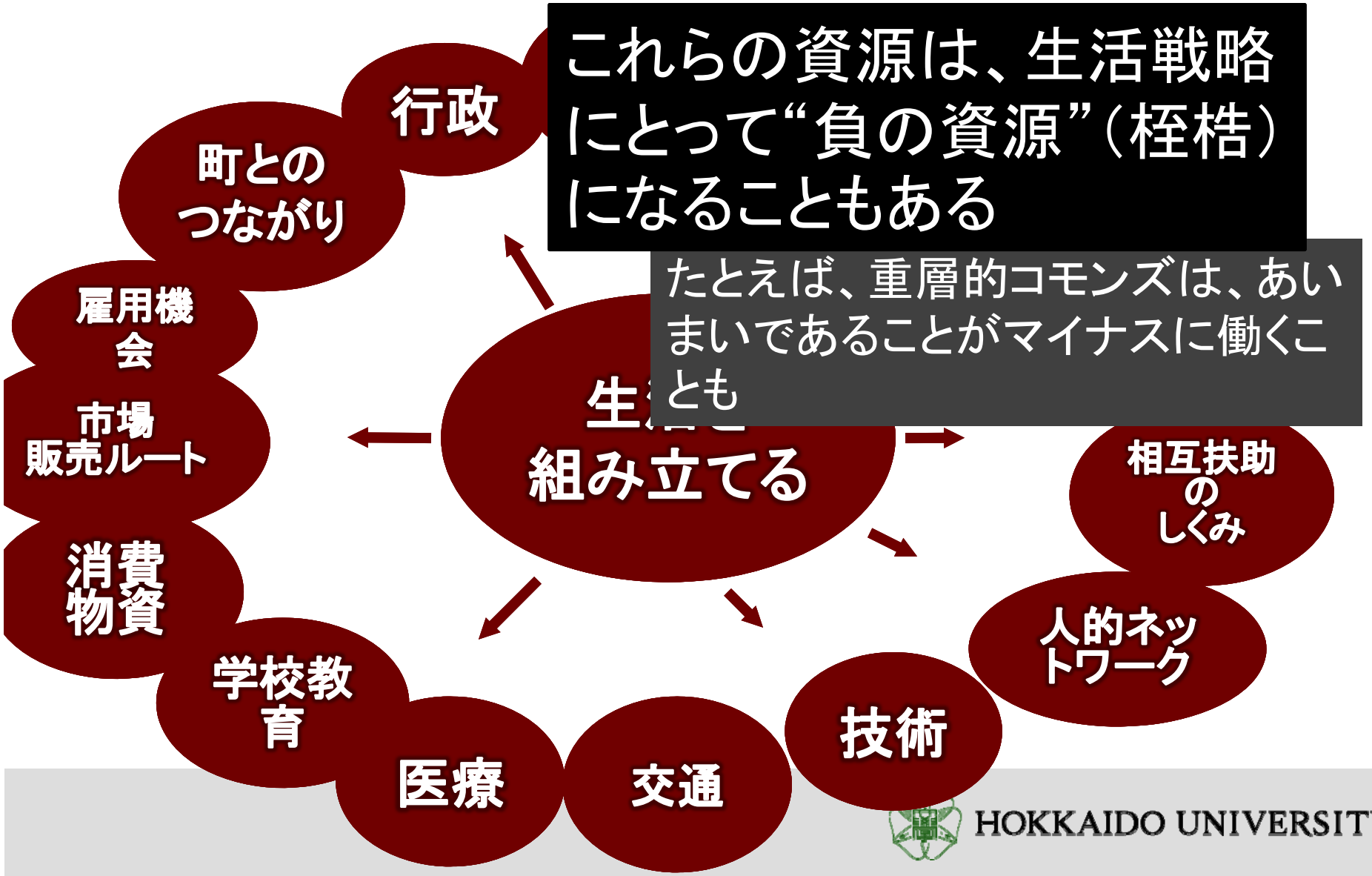
「自分たちのトライブの土地へ戻りたいと考えている」

「計画はあるが、現状ではまだ難しい」

と語る

「生活を組み立てる」ことを軸に「自然資源」とそれにかかわる社会的しくみを見る必要

さまざまな資源（リソース）を組み合わせて生活を組み立てる住民



これらの資源は、生活戦略にとって“負の資源”（桎梏）になることもある

たとえば、重層的コモンズは、あいまいであることがマイナスに働くこと

生活を“幸福に”組み立てられる社会が望ましい

生活を“幸福に”組み立てられる条件

1. 選択肢があること
2. 組み立てる主体になれること
3. 親密圏や尊厳、アイデンティティを保ちながら組み立てられること

補足:2つの新しい事態

1. アブラヤシ・プランテーション計画
2. 海外出稼ぎ

アブラヤシ・プランテーション計画

GoogleMapより

今回のアブラヤシ・プランテーション計画の「手法」

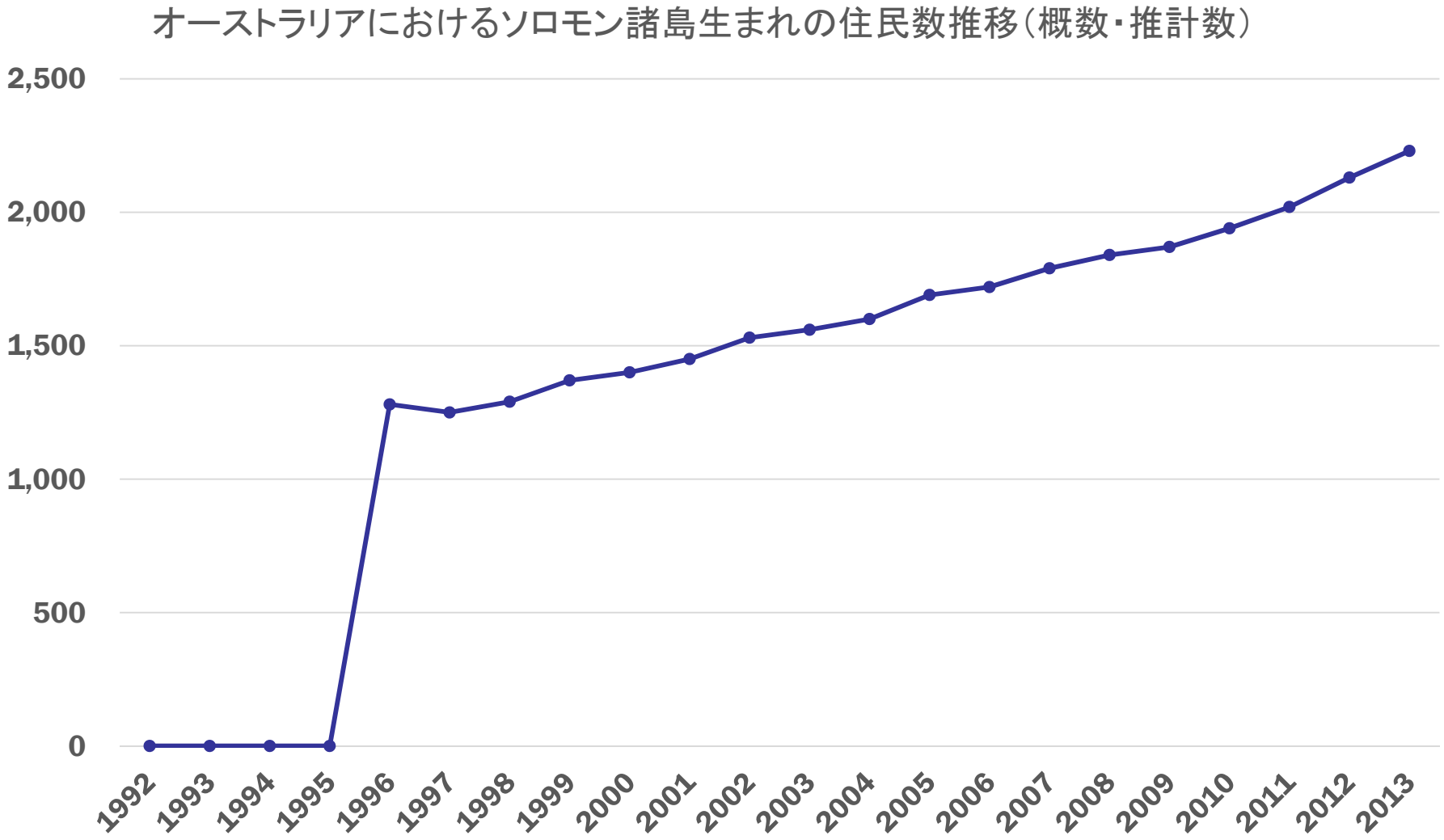
- 住民とのミーティングを重ねる
- 土地確定（和解、**GPS**による測定、境界線確定）
  - **genealogy**確定も
- トライブおよびその土地所有を土地リースに合うように制度化

住民たちにとってのアブラヤシ・プランテーション計画

- 強い期待と不安・慎重姿勢
- 住民たちの関心の所在：
  - 雇用創出
  - 現金収入
  - 土地確定＝「和解」への期待
    - 土地争いの終焉への期待
  - プロジェクトのプロセス
  - 環境（畑、森林資源）

補足:2つの新しい事態

2. 海外出稼ぎ



Australia政府統計(ABS.Stat)より

HOKKAIDO UNIVERSITY